

学位論文題名

社会的アイデンティティ理論の再検討と集団内互惠性 に関する実証的研究

学位論文内容の要旨

本論文は、現在の集団行動研究において大きな影響力を持っている社会的アイデンティティ研究の限界を示し、集団行動における相互依存性研究の重要性を指摘するために、7つの実験を行って、社会的アイデンティティ理論の妥当性の検討、代替説明原理の提案とその妥当性の証明、さらに、より一般性のある新しい理論の構築とその妥当性の検討を行っている。社会的アイデンティティ・アプローチは、集団状況におかれた個人の行動を社会的アイデンティティの高揚（自己高揚動機）という観点から説明するものである。すなわち、このアプローチでは、集団とは同じラベル（社会的アイデンティティ）をもつ個人の集合体に過ぎず、各集団成員はこの社会的アイデンティティを高めることを目指して行動するのだと説明する。この理論は、当初、内集団バイアス（内集団ひいき）の説明原理として提唱され、その後、その適用範囲はきわめて広範囲の集団現象へと拡張されている。しかし、こうした社会的アイデンティティ研究の繁栄に対し、筆者は、①社会的アイデンティティ理論が現実の集団間コンフリクトの解決に対して有益な指針を提供できない、②集団という概念が単なる個人のラベルと同一視され、集団内・外に存在する相互依存性の研究が疎かにされている、の2点を指摘する。そこで、筆者は、集団間コンフリクトの原因として社会的アイデンティティ理論が説明を試みた内集団バイアスに的を絞って、利得構造を用いて内集団バイアスを測定する方法で、実証的に論を進めている。実験の多くは、社会的アイデンティティ・アプローチの中心的な実験パラダイムである、最小条件集団実験にもとづいて行われた。

第1章・序に続く第2章では、まず社会的アイデンティティ理論が登場する以前の内集団バイアス研究について触れ、これまで提唱されてきた内集団バイアスについての説明原理を概観している。それから社会的アイデンティティ理論を導きだした最小条件集団実験研究を紹介し、さらに社会的アイデンティティ理論の内容とその特徴について解説している。次に、社会的アイデンティティ理論を支持する様々な知見と、この理論が社会心理学界に与えた影響について述べている。第3章では、社会的アイデンティティ理論の理論上の限界と、最小条件集団実験の方法論上の問題点を検討することを通して、内集団バイアスについての代替理論構築の糸口を探っている。第4章では、最小条件集団における内集団バイアスの代替説明原理としてコントロール幻想仮説を提唱し、社会的アイデンティティ理論とコントロール幻想仮説の比較検討をおこなった一連の実験研究について記述して

いる。複数の実験結果は、次の諸点を明らかにした。すなわち、a. 社会的アイデンティティ理論は、内集団ひいきの社会的評価の側面には適用できるが、利得分配などの行動の内集団ひいきを説明できないこと（筆者は、現実の集団間コンフリクトにおいて重要なのは、差別的認知である内集団評価ではなく、差別的行動である内集団ひいきであり、解明すべきはこの内集団ひいきのほうである、と主張する）。b. 内集団ひいきは自己高揚動機に基づくという Tajfel の主張に対し、むしろ内集団ひいき行動は後ろめたい行動と見なされており、したがって内集団ひいき行動はその行動が正当化できるときに多く出現すること。c. この理論が立脚した最小条件集団の実験状況が理論提唱者の主張するような minimal condition といえないこと。すなわち、幻想であっても（直接ではないが）何らかのかたちで自己にはね返ってくる（双方向依存性）ことが期待される場合のみ、内集団ひいきがおこっており、実際、コントロール幻想を保持する被験者だけが内集団ひいきをおこなっていることが示された。また、第4実験からは、最小条件集団における内集団ひいきが集団間格差を志向するとは限らないことが明らかにされた。このことから、内集団ひいきを集団間競争の産物としてとらえる社会的アイデンティティ理論の論拠が、一般に考えられている以上に不確かなことが示された。さらに「コントロール幻想仮説」は発展を遂げ、「集団協力ヒュリスティクス」という概念に辿り着く。これは集団に所属することで喚起される“集団内互惠性の期待”であり、1種の学習された信念体系である。第5章では、「集団ヒュリスティクス仮説」の理論的背景を解説するとともに、内集団ひいきは行動主体が行うだけではなく、他者にも内集団ひいきを期待していることを実験で確かめている。第6章では、集団ヒュリスティクス仮説が、最小条件集団状況のみならず、社会的ジレンマ状況においても有効であることを、2つの実験を行って検証している。これらの実験では、Tajfel らが使った利得分配マトリクスではなく、社会的ジレンマ研究で一般的に使われている囚人のジレンマタイプの利得構造を用いている。第6実験では、社会的ジレンマ状況において、外集団成員よりも内集団成員に対して協力的になるのは、内集団成員に対する互惠性期待が外集団成員に対する互惠性期待よりも強いためであることが示された。第7実験では、集団アイデンティティ効果を説明するためにこれまで提唱されてきた他の説明（心理的距離による説明、社会的アイデンティティによる説明、内集団ステレオタイプによる説明）と、集団ヒュリスティクス仮説の比較検討をおこない、集団ヒュリスティクスの妥当性が検証された。最終章では、対集団行動を合理的選択の文脈のなかで解釈することの有効性を示し、集団ヒュリスティクスは、現実の集団状況における各種の相互作用から経験的に獲得されてきた行動方略であり、対集団関係では内集団に協力することが自己利益につながる合理的選択として解釈できることを論じている。そして最終的には、対集団行動研究における相互依存性の重要性に言及している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 篠 塚 寛 美
副 査 教 授 山 岸 俊 男
副 査 教 授 金 子 勇
副 査 教 授 梶 原 景 昭

学 位 論 文 題 名

社会的アイデンティティ理論の再検討と集団内互惠性 に関する実証的研究

本論文の最大の学術的貢献は、現在、社会心理学の集団行動研究において大きな影響力を持っている社会的アイデンティティ研究の限界を示し、集団行動における相互依存性研究の重要性を再び明らかにしたことにある。学界で多大な勢力を持っている理論に反論するのは困難を伴うものだが、神氏は多面的な切り口で、社会的アイデンティティ理論の限界を指摘し、論点を1つずつ実験結果で裏付けながら自論を展開する。それらの実験仮説の構築、実験計画、実験結果の解釈・考察は緻密で堅実、論旨は一貫している。したがって、これらの数多い実証データの蓄積を見る限り、氏の論述は十分な説得性を持っており、学界で勢力を持っている強力な理論への批判研究としての本論文の試みは成功したといえる。また、既存理論への批判と同時に、より妥当性が高く広範な適用が可能な代替理論の提出は、学界への貢献・インパクトが大きいと評価できる。研究の implication の論述箇所にも多少、不徹底さは残るが、氏は論文の中で、既存理論の批判だけに留まらない広い視野で研究の位置づけをしており、今後の研究の広がり、展開が十分期待できることを明確に示している。

氏は、本論文の内容と直接つながる4つの論文をすでに公表（うち3点が審査付き論文）しており、このテーマで学会発表を、国内6回、国外2回の計8回行って、その研究内容については高い評価を受けている。

以上のことから、本審査委員会は、神信人氏が研究者として十分な能力を有することを認め、この申請論文は、博士（行動科学）の称号を授与するにふさわしいと認めた。